

## 史料からみた1640年北海道駒ヶ岳噴火

杉森玲子(東京大学史料編纂所・地震火山史料連携研究機構)

### §1. はじめに

寛永十七年六月十三日(1640年7月31日)に起きた北海道駒ヶ岳の噴火は、歴史時代の駒ヶ岳噴火の中で最も古い。北海道に伝来した最古の文献史料である『新羅之記録』(1646年)には、山が焼け崩れて津波に百余艘の昆布船が巻き込まれ、多くの死者が出た、などとある。複数の史料の記述から、噴火の推移の解明や、津波の高さの推定も行われてきた(勝井ほか 1975, つじ 1989 など)が、同時代史料の存在とその内容を確認する余地は残されている。

本研究では、『新羅之記録』以前の史料から噴火の記述を見出し、火山現象との関連を検討する。

### §2. 幕府への注進

江戸幕府が19世紀前半に編纂した『徳川実紀』では、寛永十七年六月条と九月二十七日条に、この噴火に関する記事がある。後者は、噴火当年の幕府右筆所日記の同日条に基づき、松前藩主松前公広による注進の内容を伝えている。日記の記事は「去六月十四日、蝦夷之内浦之嶽焼崩、土・毛等降下、蝦夷并松前終日如暗夜、其上高波揚陸、人民七百余斃之由、從松前志摩守注進之云々」と簡潔だが、1663年有珠山噴火の例に照らすと、注進状には、これよりも多くの情報が含まれていた可能性が高い。

### §3. 書状にみえる情報

以下の文書群には、噴火当年にその情報が伝わったことを示す書状の原本や写、案文が伝来する。

(1) 山内家御手許文書(高知城歴史博物館所蔵)

土佐藩主山内忠義の長男忠豊は、国許の父の側近あてに、寛永十七年九月晦日付で江戸から披露状を送り、老中方で叔父が写した書付を添えて、松前で津波が起き、山が出来た、と知らせた。山が出来たという記述は右筆所日記にはなく、老中方にあった松前からの注進状に由来するとみられる。二男忠直も十月一日付の披露状に書付を添え、人などが多く津波に取られたと松前藩主が注進した由、書付を参照されたい、江戸でも取沙汰されている、と伝えた。

(2) 沢庵文書(国立公文書館所蔵)

将軍徳川家光に近侍した禅僧沢庵宗彭は、出身地である但馬国出石の藩主小出吉英に、松前藩主から注進があった、と十月十一日付の書状で伝えた。その内容は、蝦夷で大波が生じると同時に山が焼け崩れ、灰土や「もへき」が降って、松前でも真っ暗となり、灰土が四、五尺積もった、蝦夷と松前を行き来する海では、五、六里も積もった山が水底から生え出た

ため、松前への通行は風波の難において安心できるようになった、千人ほどが死亡した、などである。

(3) 細川忠興文書・細川忠利文書(永青文庫所蔵)

熊本藩主細川忠利は、長男光尚が懇意の旗本の書付を添えて江戸から送ってきた九月二十三日付の書状で、海中に出来た山や千人ほどの死者など、沢庵書状と重なる内容のほか、大波が生じて海辺から潮が十一里上がったことを知った。豊後府内目付の旗本からも、一夜で富士山が出来た、江戸ではその話題ばかりである、とする書状を受け取っている。さらに、懇意にしていた松前公広からは、昆布漁の時期で七百人余りが死亡し、自身の船も破損した、という記述を含む、九月九日付の書状が届いた。

### §4. 松前の情報に基づく編纂物

大名・旗本に提出させた系図等をもとに、幕府が編纂した『寛永諸家系図伝』(1643年)の松前公広の項には、噴火について、十勝から亀田まで津波が上がって人家が漂流し、五百余人が溺死した、灰で国中が闇夜のようにになった、などとある。これと同内容の記事を寛永十七年六月条に収めた『御当家紀年録』(1664年)は、『徳川実紀』同月条の典拠とされた。『新羅之記録』は、このとき幕府に提出した系図の記述を補訂し、噴火の6年後に編纂したものである。

### §5. まとめと今後の課題

噴火当年の複数の書状は、死者数に幅はあるが、当時の幕府日記や後年の編纂物にはない情報を含み、噴火の3ヶ月後までに松前で記された注進状の内容を反映していた可能性が高い。このうち、海に山が出来たという記述は、岩屑なだれが海域に流入し、出来潤崎が形成されたことに関わるものと考えられる。また、海辺から潮が十一里上がったという記述は、山体崩壊に伴う津波が内浦湾の対岸まで到達したことを示すとみられ、津波堆積物の調査結果(西村・宮地 1998 など)とも符合する。なお、灰土や「もへき」が降った、という記述は、史料では未確認であった、火砕流等の発生を示唆するものかどうか、検討を要する。

### 謝辞

本研究は、文部科学省による「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画(第2次)」の支援を受けた。また、東京大学地震火山史料連携研究機構での研究成果の一部である。細川家史料の噴火関係記事の存在や文書群の性格については、東京大学史料編纂所で『大日本近世史料 細川家史料』の編纂を担当する山口和夫氏、林晃弘氏の御教示を得た。記して謝意を表したい。